

若手からみた保健物理

Health Physics in the viewpoint of NEXT GENERATION

荻野晴之¹⁾, 山外功太郎²⁾, 小池裕也³⁾, 小川達彦³⁾, 鈴木ちひろ³⁾

Haruyuki OGINO, Kotaro YAMASOTO, Yuya KOIKE, Tatsuhiko OGAWA, Chihiro SUZUKI

電力中央研究所¹⁾, 日本原子力研究開発機構²⁾, 東京大学³⁾

Central Research Institute of Electric Power Industry¹⁾, Japan Atomic Energy Agency²⁾, The Univ. of Tokyo³⁾

1. 「保健物理」への若手の関与

日本保健物理学会若手研究会（以下、若手研）は、放射線防護及び関連の研究や業務に携わる35歳以下の日本保健物理学会員で構成される研究会である。昨年度で発足20年目を迎えたところであり、平成21年4月現在のメンバーは39名である。若手研の活動は、従前からの若手セミナーや勉強会の企画運営のみならず、近年では日本保健物理学会理事会や各委員会への若手の参画など、時代の変遷に伴う学会活動の多様化に対応すべく、まさに過渡期を迎えている。

2. 若手からみた保健物理

「保健物理学」とは、放射線安全に関する知識、技術及び防護の概念に関する先端を切り開くことを使命とした学問であるとともに、実用の学でもある。事実、若手研究会は、放射線管理の現場を支える「技術者」と、放射線安全の先端研究の一端を担う「研究者」によって構成されている。技術者にとっての「保健物理」を考えた場合、法令順守時代とも言える昨今、マニュアル化された手順に従う作業が多く、新しい線源の出現や社会的要望の変化に対して実務現場自身で対処し、解決することが困難な状況にある。一方、研究者にとっての「保健物理」を考えた場合、研究資金獲得が優先される研究課題選択の時代であり、業務評価や研究活動維持のための研究が多く、本来の保健物理学が目指す実務現場への成果の還元ではなく、研究のための保健物理という傾向がある。

3. 保健物理の将来を考える

昨今、少子高齢化が進み、これまでの保健物理を支えてこられた諸先輩方が第一線を退かれる時期が到来しようとしている。放射線防護の研究者・技術者の質を継続的に維持し、放射線防護に携わる人材の裾野を一層広げていくためには、我々は今から何をすべきだろうか。

若手研では、第43回日本保健物理学会研究発表会において若手セッション「放射線防護の将来を考える」を企画・運営し、現状の課題について整理した上で、解決方法についてフロアを交えて議論した。また、今年9月に放射線医学総合研究所で開催された、経済協力開発機構原子力機関(OECD/NEA)主催の「放射線防護体系の進展に係る第5回アジア会合」では、「放射線防護に携わる若手人材の確保と育成」と題したセッションで、若手研と若手放射線生物学研究会(放射線影響学会)とが密に連携し、経験、責任、ポスト、魅力をキーワードに、世界の専門家を交えて直接議論した。

4. まとめ

「保健物理」が持続可能な発展を続けるためには、個々が実学としての重要性を再認識し、専門性のレベルを高めると同時に、大学、研究機関が一体となって魅力ある学問作りを体系的に進めることが重要であり、関連する政府機関からの支援も必要不可欠である。若手も学会活動等を通じて今の時期から積極的に関与し、将来の「保健物理」を支えていきたいと考えている。